

『日はまた昇る』とお金

森 本 恒 平

〔抄 録〕

『日はまた昇る』(*The Sun Also Rises*, 1926) は主人公ジェイクバーンズ (Jake Barnes) によって一人称の語りで語られる物語だ。彼は物語の中でお金に関する語りを多く行う。その中でも特に多いのがお金を支払う語りだ。なぜ彼はお金を支払う語りを多く行うのか。まず、全てのことを「単なる価値の交換」と考えているジェイクの考えを1920年代アメリカの経済発展から考察する。その後、貨幣の意味を考察することでジェイクがお金を支払う語りを多く行う理由を考えてみる。

キーワード お金を支払う語り、1920年代アメリカ、単なる価値の交換

1

『日はまた昇る』はスペインのパンプローナで7月6日から一週間かけて行われるサンフェルミンの祭りを1925年の夏に友人たちと観に行ったジェイクが一人称の語りで語る物語だ。

ジェイクはフィエスタが始まる前に友人のビル・ゴートン (Bill Gorton) と一緒にブルゲータで釣りをするため、ブレット・アシュレー (Brett Ashley) とマイク・キャンベル (Mike Campbell) が来るよりも数日早くパンプローナに到着する。友人の一人であるロバート・コーン (Robert Cohn) とはパンプローナで待ち合わせをしていた。ジェイクたちはそこからバスでブルゲータへ向かおうとしていた。ブルゲータへ向かう前に闘牛のチケットの予約を確認しようとしたジェイクは、彼が毎年チケットの手配を頼んでいる老人に会うために、その老人が勤めるパンプローナの支庁舎へ行く。市庁舎からの帰り、道の突きあたりに大聖堂が見えたのでジェイクは立ち寄り、ひざまずいて次のように祈る。

I knelt and started to pray and prayed for everybody I thought of, Brett and Mike and Bill and Robert Cohn and myself, and all the bullfighters, separately for ones I liked, and lumping all the rest, then I prayed for myself again, and while I was praying for myself I found I was getting sleepy, so I prayed that the bull-fights would be good, and that it would be a fine fiesta, and that we would get some fishing. I wondered if there

was anything else I might pray for, and I thought I would like to have some money, so I prayed that I would make a lot of money, and then I started to think how I would make it, and thinking of making money reminded me of the count,.... (102-103)

この大聖堂は10世紀に建てられた歴史を持つ聖マリア大聖堂であることが判明している。ジェイクは自分自身や友人たちや闘牛士たちのため、また闘牛やフィエスタの成功のため、これから行く釣りのために祈る。ここで注意しなければならないのは、ジェイクがわざわざ “I wondered if there was anything else I might pray for,” と前置きまでしてとってつけたかのよう語っているにもかかわらず、最後に祈るお金に関する祈りが一番具体的だということだ。

ジェイクはお金が欲しいと思い、どうしたら大金を稼げるかと考え、そのことから知り合いのある伯爵まで思い出す。この伯爵とはパリのカフェ・セレクトでブレットと一緒にいるときに彼女の友人のギリシア人の肖像画家ジジ (Zizi) から紹介されたミッピーポポラス (Mippipopolas) のことだ。彼はアメリカでチェーン店を展開し大金を稼いでいる。チェーン店のことで少し簡単な数字を挙げるとするならば、アメリカの1920年代を研究しているウィリアム・ルクテンバーグ (William E. Leuchtenburg) が次のように述べている。

Chain stores enormously in the postwar years. Chainstore units rose from 29,000 in 1918 to 160,000 in 1929, between 1919 and 1927 their sales jumped 124 per cent in drugstores, 287 per cent in groceries, and 425 per cent in the clothing business. (Leuchtenburg 192)

四章でブレットはジェイクにミッピーポポラスのことを “Owns a chain of sweetshops in the States” (40). と説明しているので、ここでは食料雑貨の数字に注目する必要がある。衣類店には及ばないまでも1925年段階でさえ途方もない売り上げを出していたであろうことは想像に難くない。ジジに金銭面での援助もしているミッピーポポラスは、一万ドルを出すことを条件と一緒にビアリッツに行こうとブレットを誘ったり、ジェイクとブレットを夕食に誘って高いワインを惜しげもなく注文したりすることができる。そのためジェイクはどうすれば大金が稼げるかと考えた際に彼のことを思い出したのだ。

ではなぜジェイクは突然お金のことを祈り始めたのだろうか。実はジェイクのお金に関する語りは何もこの箇所には始まったものではない。『日はまた昇る』ではお金に関わる話がたびたび語られる。コーンが父の遺した遺産の5万ドルを結婚生活で食い潰したという話に始まり、コーンが母親に月300ドルの仕送りを受けている話、マイクが仕立屋から借りた勲章を人にあげてしまったため仕立屋に年100ポンド支払ってきた話といったような他人のお金に関する話から、ホテルのウエイターに渡したチップの金額、売っていたワインの値段、口座に残ってい

る金額といった自分のお金に関する話など、詳しく列挙するときりがない。確かにこの物語には食事や酒を飲むシーンが多く出てくる。そのため支払いの語りが増えるのも無理はない。しかし物語が語り手であるジェイクにゆだねられている以上、彼が気にしていなければわざわざ語られることはない。逆に言えばジェイクにとってお金に関する話はそれだけ語る意味のある事だといえる。

ジェイクがこれほどまでにお金に執着する理由の一つとしては、この時期作者のアーネスト・ヘミングウェイ (Ernest Hemingway) が妻ハドリー (Hadley) と結婚したばかりでお金に余裕のある状況ではなかったということが関係しているのかもしれない。ヘミングウェイはパリ時代を思い出して書いた『移動祝祭日』(*A Moveable Feast*, 1964) で、困窮した生活を思い返しながら、“In those days there was no money to buy books” (31). と述べ、次のようにも語っている。

By any standards we were still very poor and I still made such small economies as saying that I had been asked out for lunch and then spending two hours walking in the Luxembourg gardens and coming back to describe the marvelous lunch to my wife. (*Feast* 82)

しかし、ジェイク＝ヘミングウェイと考え、ジェイクが単にお金に困っているためにお金に執着していると考えるのは性急だ。ヘミングウェイは既婚者だがジェイクは独身だ。ヘミングウェイは1925年のスペイン旅行にも妻のハドリーを伴って行っている。そのことだけを考えてもジェイクはヘミングウェイとは似て非なる人物である。独身者であるジェイクは作者とは違い、養わなければならない家族がいない。責任が薄い。ジェイクが使うお金は少なくてすむし、彼は自分のために作者ヘミングウェイより多くのお金を使うことができるだろう。そして何より彼は作者とは違い、アメリカ本国の新聞記者という定職を持っている。

ジェイクの懐事情を知る手がかりが物語の中にある。ジェイクがパリのアパートでアメリカからの銀行収支報告書を受け取り、口座の額と今月使って差し引かれる小切手の額と照らし合わせる場面だ。

The letters were from the States. One was a bank statement. It showed a balance of \$2432.60. I got out my check-book and deducted four checks drawn since the first of the month, and discovered I had a balance of \$1832.60. I wrote this on the back of the statement. (37-38)

銀行からきた収支報告書には2432ドル60セントとある。預金の残高は1832ドル60セントにな

った。しかしその預金の額は重要ではない。重要なのはジェイクがいくら使っているのか、ということである。この計算をした日が何月何日なのかは分からないが、残高が1832ドル60セントなので、この月には少なくとも小切手だけで600ドル以上を使ったことになる。当時のアメリカでの年間生活費は1800ドルといわれ、労働者の平均年収は1500ドル以下だった（有賀111）。また、世間並みの生活をする最低基準が年収2500ドルといわれ、1929年ですら、その年収以下だった世帯は全世帯の71%を占めていた（Leuchtenburg 194）。ジェイクが何にどれだけ使い、その際どれだけ頭を悩ませたのかは分からないが、一ヶ月に600ドルの小切手を切れるということはそれなりに稼ぎがあることを意味しているだろう。

これらのことと、当時のフランに対するドルの強さとを考えると、ジェイクのお金に執着した語りは儉約のためというわけではなさそうだ。ジェイクにとってお金に関する語りの多さは彼の懷事情よりももっと異なった意味がある。ジェイクがなぜこれほどまでお金に執着するのか、もう少し注意深く考えてみよう。

2

ジェイクの語るお金に関する語りの中でも特に注意を引くのが、彼が誰かにお金を払う語りの多さである。彼のお金に関する語りは、しばしば具体的に支払った細かな金額にまで及ぶ。“paid” や “gave”、“tipped”、“got the bill”、というような単語を使うことでジェイク自身が誰かにお金を渡す語りをしている箇所と、実際に細かな金額を記しお金を渡す語りをしている箇所は、物語中じつに25回に及ぶ。ジェイクはお金に執着する人間だが、特に自分がお金を払ったということを気にかけている人間だと言える。

ジェイクの支払いの語りの多さについてはすでにマイケル・レイノルズ（Michael S. Reynolds）によっても指摘されている。レイノルズは “Money, as more than one critic has told us, becomes a satiric device in the novel, due largely to Jake’s continuous references to paying bill” (47). と考え、“It is Jake who pays the bills — bar bills, hotel bills, and bills of moral debt. In the end, as we will see, the bill for Pamplona is far greater than he expected” (47). とジェイクがお金を支払い続けることを指摘する。しかし彼の論文におけるその指摘は、その後の1920年代アメリカ社会を論じるための入り口でしかない。レイノルズは “It is the world in which he lives, not Jake Barnes, that has reduced everything to such a ‘clear financial basis’” (47). と考え、なぜジェイクがお金を支払う語りをおこなうのか、といったジェイク個人の具体的な作品分析を行わず、当時のアメリカ社会を論じている。

ではなぜジェイクは自分がお金を払うことに対して特に気にかけているのだろうか。それには彼がお金を支払うことに関してどのような考えを持っているのかを知る必要がある。

ジェイクはフィエスタが始まる2日前の夜、ホテルモントーヤの自室のベッドに横になり、ブレット、マイク、コーンたちの人間関係に思索をめぐらせ、自分の価値観について考える。

そのきっかけは夕食時にコーンとマイクのブレットをめぐる派手な口論だった。ブレットに入れ込んでつきまとうコーンを彼女の婚約者のマイクが侮辱したことがきっかけだった。ブレットとの関係に物語を通して悩んでいるジェイクは、寝ようとするもののなかなか寝付けない。やがて彼の考えは次のような人生観へとシフトしていく。

I thought I had paid for everything. Not like the women pays and pays and pays. No idea of retribution or punishment. Just exchange of values. You gave up something and got something else. Or you worked for something. You paid some way for everything that was any good. I paid my way into enough things that I liked, so that I had a good time. Either you paid by learning about them, or by experience, or by taking chances, or by money. Enjoying living was learning to get your money's worth and knowing when you had it. You could get your money's worth. The world was a good place to buy in. It seemed like a fine philosophy. In five years, I thought, it will seem just as silly as all the other fine philosophies I've had. (152)

レイノルズはこの場面を引用しながら、“Five years later, in 1931, Jake might have told the country plunging into the Depression: ‘I told you so’” (47). と述べる。だが、“might have told” と考えているように、ジェイクの語るお金に関する語りが“a satiric device”であるのかどうかは推測の域を出ない。ジェイクの語りをこの小説が刊行された1926年を基準に考えるならば、経済学者ですら予測できなかった世界恐慌をジェイクが予測できたとは思えず、お金に関する彼の語りが最終的に“a satiric device”となったことは単なる結果論でしかない。支払うことにジェイクはどのような意味をもたせているのか、もう少し具体的に考えてみよう。

生を楽しむことは、支払いによって得られる価値あるものを手に入れることを学ぶことだと考えるジェイクは、今まで同じ価値のものどうしを交換してきただけだと考えている。彼は何かを支払ってきて、それに相応する価値のものを手に入れてきたと考えている。彼にとってこの世の中の全ては等価交換であり、「単なる価値の交換」でしかない。彼は得てきたものは全て彼が何かに対して別の何かを支払うことで得られた対価だ、と考えていることが分かる。

しかしこの考え方はジェイクのオリジナルのものではない。この考えはそもそも経済学の基本的な考えである。古典派経済学の入門書として有名なアダム・スミスの (Adam Smith) 『諸国民の富』 (*An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, 1776) で、アダム・スミスは人間を成人したあととは独立して助け合うことのない他の動物と比較しながら次のように述べる。

But man has almost constant occasion for the help of his brethren, and it is in vain for

him to expect it from their benevolence only. He will be more likely to prevail if he can interest their self-love in his favour, and shew them that it is for their own advantage to do for him what he requires of them. Whoever offers to another a bargain of any kind, proposes to do this: Give me that which I want, and you shall have this which you want, is the meaning of every such offer; and it is in this manner that we obtain from one another the far greater part of those good offices which we stand in need of. (Smith)

つまり人はお互いに足りないものを交換することで経済活動を行ってきた。しかし交換の時には相手の慈愛心に訴えるのではなく、自愛心に訴えることが求められる。自分にとって利益になる交換を提案しようと思うならば、その交換が相手にとっても同程度の利益になることを提示しなければ交換は成り立しない。このことから分かるように、この世の中の全ては等価交換であり「単なる価値の交換」だ、というジェイクの考えは明らかにこのアダム・スミスのようだ。ジェイクがこのような考えを持つに至ったのには1920年代アメリカの経済発展が関係していると思われる。次に1920年代のアメリカの状況に注目しながら、なぜジェイクが世の中の全てを「単なる価値の交換」と考えるようになったのか、考えてみよう。

第一次世界大戦後のアメリカがどのような状況に合ったのかは多くの研究者が研究していて皆知るところだ。「狂騒の20年代」や「ジャズ・エイジ」といった言葉がすぐに思い浮かぶであろう。1920年代は戦場とならなかったアメリカが第二次産業革命を経て、内需がどんどん拡大していった年代だ。電気の普及によりラジオ、洗濯機、トースター、掃除機、ミシンといった電化製品が飛ぶように売れた。1912年から1929年までに電気冷蔵庫の生産は160倍を超えた (Leuchtenburg 195)。自動車産業ではヘンリー・フォード (Henry Ford) がいち早くベルトコンベアーによる流れ作業での製造方法を導入して中間層にも購入できる安価な自動車の生産を可能にした。1926年段階で自動車の登録台数はイギリスが104万台、フランスが89万台だったのに対して、アメリカでは2205万台を数えていた (浜島 205)。広告による宣伝が大きく展開され、購買意欲をかきたてられた中産階級の人々が大量生産された製品を買い求めた。分割払いによる買い物の方法が普及したために消費は加速する一方だった。1931年に完成したニューヨークのエンパイア・ステート・ビルはこの時代の繁栄の象徴だった。またボクシングや野球といったスポーツや、ジャズやチャールストンダンス、映画のような大衆娯楽が大流行し始めたのもこの時代である。アメリカ史の研究者である有賀夏紀は「大多数の人々が生活必需品以外の商品を購入し、レジャーを楽しむ金銭的な余裕があるという社会が世界史上始めて出現した。」(104)と述べる。事実は貧困格差が生まれ3分の2以上の人々が最低の生活を維持するに留まっていた (有賀 111)。また禁酒法 (1920-1933) によるギャングの暗躍や、黒人の社会進出を阻止するために秘密結社のKKK団が急速な広がりを見せるなど問題は山積してい

たが、それでも一般に1920年代のアメリカはまさに大量生産、大量消費の時代だったと言われている。

このような近代資本主義社会のアメリカを経験しているジェイクが、お金を支払う対価と同じ価値のものを手に入れてきたという考えに至るのは当然のことだ。有賀は「アメリカ人は『我消費する、故に我あり』と、自分の存在意義を確認するかのように商品を買った。」(107) と述べる。お金を使い、物を手に入れることがアメリカ人のアイデンティティになっていた、という指摘だ。お金を支払うことでそれと同じ価値のものならば何でも手に入れることができた時代だったからこそ、ジェイクは全てを「単なる価値の交換」と見なす考えに至ったと言える。

また、『日はまた昇る』にはジェイク以外にも彼と類似した考えを示す人がいる。アメリカ人でシカゴ出身の友人のビル・ゴートンだ。パンプローナに出発する前、ジェイクはビルとパリで合流する約束をし、彼と再会した夕方にサン・ルイ島へ食事に向かう。その道すがら、すでに酔っていた勢いで、ビルは剥製を売る店の前で犬の剥製を買おうと主張し始める。呆れて軽い返事をするジェイクにビルは“Mean everything in the world to you after you bought it. Simple exchange of values. You give them money. They give you a stuffed dog” (78). と言う。

ビルが酔っ払い、ふざけて喋った台詞であるために、この台詞はあまり注目されてはいない。『日はまた昇る』をその草稿段階から研究をしているフレデリック・スヴォボダ (Frederic Joseph Svoboda) はこの箇所に触れ、“Bill’s description of the fixed fight and its aftermath is splendidly comic; Hemingway continued the comic tone in Bill’s delightfully fractured discussion of values as they relate to stuffed animals” (28). と述べる。しかしコミック・トーンで語られたこの箇所を “the tone of his discussion about stuffed dogs tells much more about his essential gentleness and his accurate perception of the world,…” (28). と述べ、ビルは性格が良いと考えるだけでその世界の認識がどういうものであるのか具体的には触れてはいない。だが酔っていたとはいえ、ジェイクと同じく「単なる価値の交換」と述べるビルにも、これまでみてきたように、アメリカ人であるがゆえに、やはり当時のアメリカの経済発展が大きく反映されていると考えるのが妥当である。

そしてこの二人のアメリカ人の考えを助長させたのが、アメリカ以上にお金を使うことができるフランスという国だ。全てを「単なる価値の交換」とであるという考えに至るにはお金を実際に使うことができる状況下がいなければならない。日々お金を使い、何かと交換する生活に身を置いている状況にいるからこそ、この考えが生まれるのだ。それにはアメリカ本国よりもフランスの方が適していた。次にフランスの通貨であるフランとアメリカのドルの関係を見てみよう。

世界第一位の経済規模になっていたとはいえ、内需国であったアメリカが変化していくのは

第一次世界大戦を経験したからだった。アメリカはヨーロッパ各国が軍備に使う鉄鋼や食料としての小麦を輸出し、またフランスやイギリスの多額の債権を保有して、彼らの戦争を支援してきた。そのために戦後、ドルの価値はヨーロッパの通貨に対して非常に強くなっていた。アメリカでは大戦前の1914年では債務総額が約35億ドルだったのに対して、大戦後では債権総額が125億ドルにまで上っていた（浜島 204）。一方、戦争の費用を賄うために外国に対して借金をしたフランスは1913年には450億フランの債権国だったのに対して、1919年には350億フランの債務国となる。それは損害と負債を合わせて11年分の投資額であり、15ヶ月分の国民総生産に相当した。当然フランスの通貨であるフランはインフレーションを起こしていた。物価は1924年から1922年までのあいだで三倍に、1922年から1928年までのあいだでさらにその倍に上がった（プロスト 42-44）。フランス人にとっては大変な事態もアメリカ人たちがパリに移り住むのには都合が良かった。レイノルズは次のように述べる。

The bull market roared and the dollar climbed, peaking that fall (1925) at 26 francs when a half franc bought a mug of beer, 1.65 francs bought a load of bread, and 800 francs rented a furnished flat for a month. Americans flowed into Paris, changing everything. By early 1924 100,000 English-speaking residents crowded the city; during the summer season their number doubled. On the Left and Right banks, Americans were everywhere. (Reynolds 48)

残念ながら、なぜフランスで生活をしているのかという問いに、実際にジェイクが物語の中で具体的に答えている箇所はない。テキストの中の「アメリカ」を探しながら『日はまた昇る』と『グレート・ギャツビー』（*The Great Gatsby*, 1925）を比較している論文のなかで上西哲雄は、創作のためではないかと推測するも、十分な証拠を見いだせず、「読者が当然承知していることを前提に省略されているかのようだ。」（166）と考える。確かにこれだけの人数のアメリカ人がパリに流れ込んでいたことを考えると、ジェイクがパリにいる理由もヘミングウェイ流の氷山の下に隠れた書く必要のない当然の事項なのかもしれない。アメリカ人がパリに移り住むことはこの時代の大きな流れであった。その理由の一つとして、自国の通貨の方が強い国で暮らすことによる恩恵が「全てを変えたい」と思ったアメリカ人たちをパリに向かわせる要因になっていた、とも十分に考えられる。レイノルズは“More and more clubs, bars, and dancings opened up to water the crowd, to cater to American money. Prices went up, gentrifying the old bohemian way of life”（48）と述べる。渡仏の理由はどうあれ、ジェイクはパリでいつもいろんなカフェに足を運んでは、友人たちと飲み、食事をする姿を語っている。そのような生活が可能なのはドルがフランに対して圧倒的に価値が高いからといえる。

以上、ジェイクたちアメリカ人は近代化され合理化された経済社会の中において、日々品物の

売り買いが活発に行われるのを目の当たりにしていた。さらに自国の通貨ドルはフランスでは欲しいものを手に入れることのできる量のフランに変えることができた。このことからジェイクたちは、全ては「単純な価値の交換」であるという考えに至ったのだ。

ではジェイクの考えはこの時代のアメリカ人を代表するものなのだろうか。ジェイクにお金を支払う語が多い理由は、本当に彼が全てを「単なる価値の交換」とみなし、何かを手に入れるために、常に支払いをし続けてきたと考えるからなのだろうか。ここで注意しなければならないのは、ビルとジェイクの考えには少し違いがあるということだ。ビルにとって、この価値観は“give them money”という言いをすることでジェイクよりもっと直接的だ。剥製を売る店でお金を支払えばそれと同等の価値の剥製を手に入れることができる。だが具体的かつ直接的であるゆえに彼の台詞は貨幣を使った単なる経済的な交換のことを言っているだけでも映る。しかし上記に引用したジェイクの考えは経済的な交換に留まっただけではない。“You gave up something and got something else.”と述べるように、ジェイクにとっての価値の交換とは、単にお金と品物を交換するだけの意味ではない。この世の中の全てが「単なる価値の交換」であり、等価交換だと考えるジェイクは、お金を使った品物の売買だけでなく人生における経験すらその交換によって得てきたと考えているのではないだろうか。彼の考える「単純な価値の交換」の意味をお金と品物を交換する等価交換であると考えただけではジェイクがお金を支払う語りに固執する理由にたどり着けない。お金を使った売買だけでなく、何かを得るために何かと交換してきたという考えが、彼がお金を支払う語りに固執する理由になっている。

3

確かに近代社会の経済は上記のような同じ価値のものを交換をすることで成り立っている。その際、腐敗して損をしにくい、分割しやすいといった理由から貨幣が一時的に象徴的に価値を付加されて用いられる。貨幣を用いることで交換は同時に直接的に不特定多数の関係のなかで行うことができる。貨幣を用いることで人間関係は常に貸し借りの状態に清算され、お互いの利益の中でのみ交換が行われる。そのようにして近代経済は成立している。ドイツの哲学者で貨幣の意味を考えたゲオルグ・ジンメル (Georg Simmel) の著作『貨幣の哲学』(Philosophie des Geldes, 1900) の項目を『社会学小事典』(2005) で引くと、その言葉の意味について次のような説明がある。

交換における獲得の困難性(価値)を「秤量の相互性」を通じて表現する貨幣は、社会の信頼に支えられて実体から象徴へと発展する。そしていかなる目的に対しても手段になりうること(絶対的手段)によって自ら究極目的=神となる(分析篇)。貨幣は巨大な事実世界を分離独立させることにより、個人に自由と欲望の分化をもたらす…(略)…。(『社会学小事典』84)

そう考えるならば、ガートルード・スタイン（Gertrude Stein）に「ロストジェネレーション」と呼ばれ、伝統を守らずいつも飲んだくれてばかりいたヘミングウェイたちの世代は、まさに貨幣経済が発展していく中、あらゆるものにお金を支払うことを覚えた結果、前時代の伝統や決まり事すらお金という手段で交換可能であるとみなし、あらゆることが「単なる価値の交換」でしかないと考えようになったと言える。

だがジェイクが発展させて考えたように、品物と貨幣の単純な売買の関係の外にまで貨幣経済の考えを用いることは可能なのだろうか。

1925年1月に『社会学年報』(*L'Année Sociologique*)に発表された「贈与論」(“*Essai sur le don*”)で人類学者のマルセル・モース（Marcel Mauss）は「発展が経済上の法を、物々交換から販売へ、現金販売から信用販売へと移したのではない。一定期間の中で与え、返却される体系の上に、一方で物々交換が生まれた。」(99)として、貨幣による経済活動が元々は贈与交換によって派生した一システムでしかないことを論じている。そして貨幣を用いた近代経済的交換の一方でアメリカ北西部の部族に残るポトラッチという贈与制度について注目したモースは、贈与の交換が持つ三つの義務について考察を深めていく。その三つの義務とは、贈る義務、受け取る義務、返礼をする義務である。

まず贈与の義務だ。自分の名声や権威を保つために部族の首長は必要以上の贈り物をする。財産を消費し、他人と共有し、他人に貸しを作ることが財産所有の証となる。第二に受け取る義務がある。モースによると「贈り物を拒むことはお返しすることを恐れている」(Mauss 106)ことを意味している。贈り物は受け取られなければ名声を保てなくなる。贈り物を贈られた側はそれを受け取ることで分相応であることを証明し、今度は返礼の準備をすることになる。最後は返礼の義務である。贈り物にはマナという霊的な力がついていて、送り主のところに戻ろうとする力を持っている。返礼を怠りマナを留めておくならば悪い影響を及ぼすと言われる。マナは留まってはいけないので、一度贈与が行われると、一つの贈与は次の贈与をもたらし、際限がない。また返礼には、自分の力を見せつけるため十分なお返しをしなければならない。このようにして贈与による交換はお互いに貸し借りをなすりつけ合う戦いのようなになる。時には部族の長は贈与で財産を全て失うこともあった。

このようにポトラッチの贈与は人間関係が清算されることなく一つの贈与が次の贈与関係を生む。そしてその贈与は交換による利益だけが目的なのではなく、名声や評判、地位を確認するために行われる。ではモースの贈与交換は1925年のヨーロッパ社会にも存在していたのだろうか。モースは考える。

われわれの道徳や生活の大部分は、いつまでも義務と自由とが入り交じった贈与の雰囲気そのものの中に留まっている。幸運にも今はまだ、すべてが売買という観点から評価されているわけではない。金銭面での価値しか持たない物も存在するが、物には金銭的価値

に加えて感情的価値がある。(Mauss 260)

もちろん贈与によって貸し借りが生まれ人間関係が清算されずに次のお返しをしなければならないということは、当然この現代においても残っている。モースはすべてが売買という観点から評価されているわけではないと述べる。ジェイクがこの学術誌に目を通していているとは思えないが、同じ時代に書かれているにも関わらず、全てを「単なる価値の交換」と考えるジェイクとはまったく逆だ。本当にジェイクの考える「単なる価値の交換」は成立していたのだろうか。そのことをサンフェルミンの祭りが始まった場面から考えてみる。

次の場面は農夫たちがワインに対する支払いの価値観をどう変化させていくかを語っている場面だ。ジェイクは農夫たちを表す表現として中世の小作人や田舎者と言った意味の“peasants”という単語を使うことでスペインの田舎くささを表現している。

The peasants were in outlying wine-shops. There they were drinking, getting ready for the fiesta. They had come in so recently from the plains and the hills that it was necessary that they make their shifting in values gradually. They could not start in paying café prices. They got their money's worth in the wine-shops. Money still had a definite value in hours worked and bushels of grain sold. Late in the fiesta it would not matter what they paid, nor where they bought. (156)

一見ジェイクは彼ら農夫を客観的によく観察しているように見える。初めに彼らはワインを自分たちが売った穀物に見合う場所で手に入れるが、フィエスタが進むにつれて何に支払おうとどこで買おうと気にしなくなる、とジェイクはその変化に目を光らせているように見える。しかし実はそうではない。なぜならこのことはジェイク自身にも当てはまるからだ。先に述べたようにジェイクは物語を通して25回も自分が支払いをする場面を語る。だが彼はサンフェルミンの祭りが始まって終わるまでの間、3回しか支払いをする場面を語らない。その3回ですらフィエスタが始まった初日にワインショップでワインを頼んだときと、直後にワインを入れる革袋を買いに行った時、そしてワインショップに戻ってきて革袋に入れたワインの支払いを語るだけだ。その後1週間続くフィエスタの間、その箇所以外にジェイクは食事や酒の支払いについて語らず、いくら払ったのかということも言わなくなる。「いくら払ったか」ではなく、「何をしたか」に焦点が当てられる。農夫たちだけでなく明らかにジェイク自身もお金を使ったことを気にしなくなっている。ここでは全てのことは「単なる価値の交換」だと考えるジェイクの哲学をジェイク自身が忘れてしまっている。ジェイクが「単なる価値の交換」という経済的な考え方を忘れてしまう場所がスペインなのだ。

このことがジェイクの人間関係にも影響する。お金の支払いを気にしなくなったために、他

人に対する貸し借りやそこに生じる上下関係が生まれてきてしまう。人間関係は清算されず、ブレットやコーンに対する感情は強まるばかりであった。そこには全てを「単なる価値の交換」と考えるジェイクの姿がない。最終的にジェイクはブレットをペドロ・ロメロ（Pedro Romero）という若い闘牛士に紹介したことが原因でコーンと殴り合いの喧嘩までしてしまう。

フィエスタが終わったあと、物語の最後でジェイクはスペインのパンプローナからフランスのサン・セバスチャンに戻ってくる。彼はカフェに入って食事をした際、ウェイターが薦めてくれたイッサラという酒を断った。ウェイターが機嫌を悪くしないようにジェイクは少し多めにチップを渡し、次のように考える。

It felt comfortable to be in a country where it is so simple to make people happy. You can never tell whether a Spanish waiter will thank you. Everything is on such a clear financial basis in France. It is the simplest country to live in. No one makes things complicated by becoming your friend for any obscure reason. If you want people like you you have only to spend a little money. (237)

気を悪くしないように少し多めにチップを渡す。フランスで人間関係を構築するにはお金を少し多く払えばすむとジェイクは考える。自分の価値を相手に認めさせるには相応の価値のお金を相手に渡すだけでよい。そこには余計な感情が入る余地はない。相手もその額に応じてジェイクという人間を値踏みすることになる。これほど分かりやすく単純なことはない。フィエスタが終わった後から、彼はお金を支払う語りを再び始める。

しかしジェイクにとってフランスと対比されているのがスペインである。ブレットが駆け落ちした闘牛士と分かれてジェイクに助けを求める電報を送ってきたとき、彼女を迎えに行くと決めたジェイクは“I hated to leave France. Life was so simple in France. I felt I was a fool to be going back into Spain. In Spain you could not tell about anything. I felt like a fool to be going back into it…” (237). と考えて、お金で解決できるフランスを離れることを嫌がる。まだフランスほど近代化されていないスペインではフランスのように「単なる価値の交換」で全てが成り立っているわけではないとジェイクは考えているのだ。スペインでは「単なる価値の交換」という哲学が通用しなかったことをジェイク自身が認めている。スペインではフランスのように人間の感情をお金の支払いで手に入れることができないのだ。

このスペインに憧れながらフランスの方が生きやすいと考えるジェイク態度について上西はアメリカを幻視しながら次のように述べる。

言葉を越えたアフィシオンに象徴されるスペインの価値基準の世界に惹かれながら、カネの基準が支配するフランスの方が生きやすいとするジェイク。国境付近でぐずぐずする態

度は、憧れる対象と自らの現実をわきまえたスタンスの縋い交ぜな心理状態と言えるのではないか。…(略)…そこには新しく世界を支配しようとする(アメリカの)価値基準に対して取るべき態度が、如何に微妙で難しいものかを洞察した者の思いが込められている。(上西 171)

しかし、この場面はやはり人間関係とお金を支払うことの関係から考察をすべきではないだろうか。貨幣経済が浸透しているパリで、ジェイクは常にお金を支払う語りをを行い、あらゆる価値観を経済に置き換えて考えた。逆に言えば、そう考えなければブレットやコーンともうまくやることのできないほどジェイクは悩んでいたと言える。戦争で陰部を怪我してしまった彼は性不能者になってしまっている。そのことが原因で、お互いに愛し合いながらもジェイクは性に放埒なブレットと結ばれることはない。ブレットとの関係に悩むジェイクは彼女との関係を円滑にするために、人間関係にまで「単なる価値の交換」という考えをもちこみ、品物と貨幣で行う売買のように人間関係をそのつど清算しようとしている人間だと言える。ジェイクがわざわざお金を支払うことを語り続けるのは、そうしていないと「単なる価値の交換」という考えを忘れてしまうからだ。これこそジェイクがお金を払う行為を気にかける理由だ。しかしサンフェルミンの祭りを見に行っただけにはスペインにという前時代的な場所とフィエスタという非日常的な空間がそうさせてはくれなかった。彼が “It seemed like a fine philosophy. In five years, I thought, it will seem just as silly as all the other fine philosophies I’ve had” (152). と述べる時、それは何よりも「単なる価値の交換」という考えを人間関係にまで当てはめようとするジェイクの自信のなさの現われなのだ。

ジェイクが全てを「単なる価値の交換」だと見なす考え方は、1920年代のアメリカが経済発展していく中で芽生えた考え方だが、ジェイクがそれを人間関係に応用しようとしたのはブレットとの関係に悩んでいたからである。彼は物語全編を通してブレットや彼女を取り巻く友人たちとの人間関係に悩み続けている。彼はその人間関係を常にお金の支払いによって清算し、貸し借りのない状態に戻すことを夢みていたのではないだろうか。自分が誰にどれだけの対価を支払ったか、ということはジェイクにとって、貸し借りを作らず人間関係を円滑に進める上でとても重要な行為である。支払いの語りを忘れてしまっていたスペインで人間関係が悪くなるのはそのためだ。ジェイクにとってお金を支払う行為を語ることは、この世の中の関係全てが「単なる価値の交換」であることを再確認する作業なのだ。

[Works Cited]

Hemingway, Ernest. *The Sun Also Rises*. 1926. London : Scribner, 2006.

Hemingway, Ernest. *A Moveable Feast*. 1964. New York : Scribner, 2009.

- Leuchtenburg, William E. *The Perils of Prosperity*. Chicago : U of Chicago P, 1958.
- Reynolds, Michael S. “The Sun in its Time : Recovering the Historical Context.” *New Essays on The Sun Also Rises*. Ed. Linda Wagner-Martin. New York : Cambridge UP, 1987. 43-64.
- Svoboda, Frederic Joseph. *Hemingway & The Sun Also Rises : The Crafting of a Style*. Lawrence : UP of Kansas, 1983.
- Smith, Adam. *An Inquiry Into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, vol. 1. Online Library of Liberty, 1776. Web. 20 September 2014
<<http://oll.libertyfund.org/titles/237>>.
- 有賀夏紀 『アメリカの20世紀(上) 1890年～1945年』(中公新書, 2002)
- 濱嶋朗他編 『社会学小事典』(有斐閣, 2005)
- 上西哲雄 「国籍離脱者と残留者のきずな」『アーネスト・ヘミングウェイの文学』今村楯夫編 (ミネルヴァ書房, 2006) 162-175頁。
- 浜島書店編集部 『ニューステージ 世界史詳覧』(浜島書店, 1997)
- プロスト, アントワーズ, 村上眞弓訳 『20世紀のフランス—歴史と社会—』(昭和堂, 1994)
- モース, マルセル, 吉田禎吾・江川純一訳 『贈与論』(ちくま学芸文庫, 2009)

(もりもと こうへい 文学研究科英米文学専攻博士後期課程満期退学)

(指導教員：野間 正二 教授)

2014年 9 月29日受理